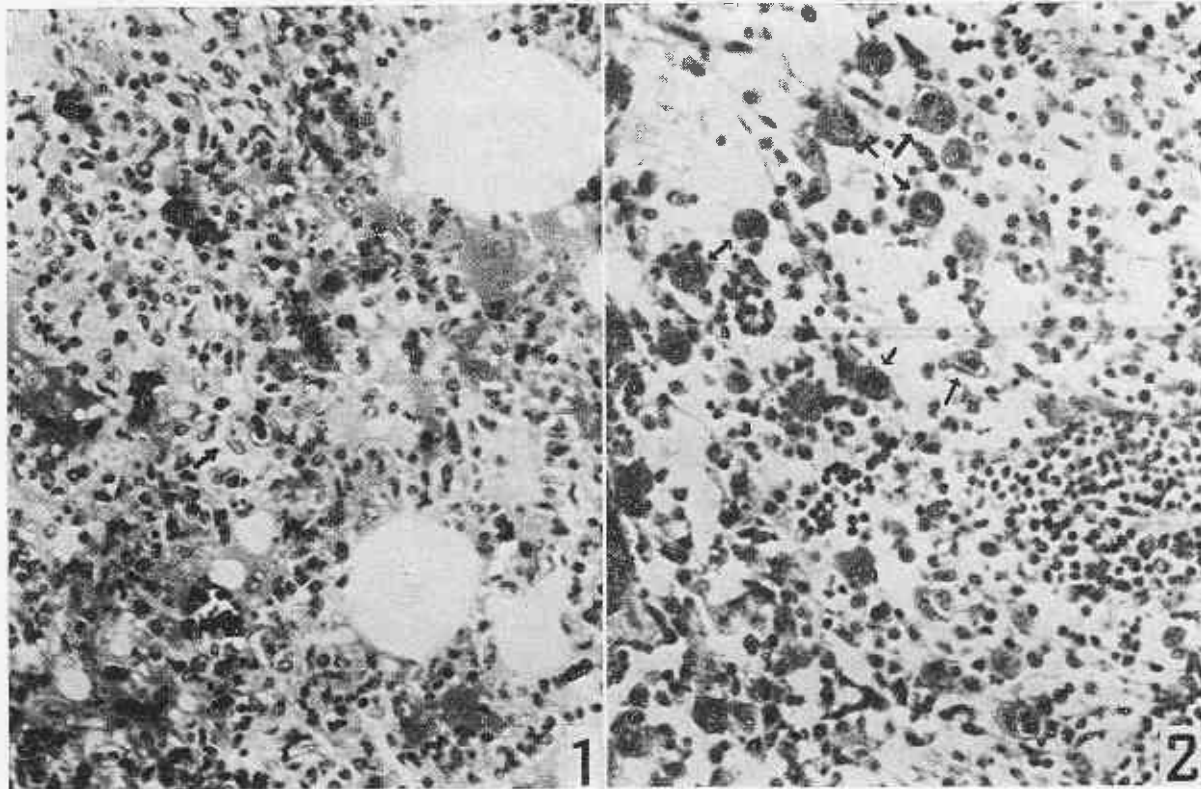


## チンパンジーの巨細胞封入体症

徳島衛生研究所出題・第7回獣医病理研修会標本 No. 90



チンパンジー、4才、♂、アフリカ産、1965年5月徳島市立動物園に入園。

1966年7月26日頃から元気消失、下痢、食欲不振を示し、9月3日死亡した。剖検時胃粘膜の点状出血及び小腸炎が認められたと云う。検査のため持参された肺及び肺門リンパ節について、肺は含気量少なく密実感にとみ胸膜の肥厚、点状出血が認められた。剖面では気管支周囲性の無気肺巣が各葉で種々の程度に見られた。肺門リンパ節は白色調で、軽度の腫大を示した。組織学的検査により肺では胞隔炎、胸膜炎を主体とする間質性肺炎像が広く認められた他、肺胞中隔(図1)、間質結合組織、気管支腺上皮、同粘膜上皮及び肺胞上皮細胞並びに気管支周囲リンパ装置の細網細胞に大きな核内封入体を特徴とする巨細胞が数多く散見された。肺門リンパ節は洞カタルを示し、洞内には核内封入体を持つ同様の巨細胞(図2)が散見された。これらの巨細胞の大きさは最大長径 $33\mu$ 以上で、豊富な原形質は嗜塩基性を増し、比較的稀ながら紫色の顆粒状原形質内封入体の散見されるものもあつた。核内封入体は通常明暈を持ち、最大長径 $18\mu$ 以上で、内部に少々濃く染る微細な顆粒状構造が認め

られた。封入体はフォイルゲン反応陽性でH.-E.染色では青紫色を示すものあるいは赤紫色ないし淡桃色を示すものと若干相違が見られた。

本症の原因であるサイトメガロウイルスは種族特異性である(Smith, 1959)と云われているが、各ウイルス間あるいはウイルス宿主間の関係は未だ充分明確ではない。チンパンジーの巨細胞封入体症についてはVogelら(1955)の報告があり、チンパンジーはサイトメガロウイルスに対し抵抗性が低いとされている。今回は唾液腺を始め、全身諸臓器の検索が欠けているので、残念ながら感染の全貌を窺うことは出来なかつた。しかしサイトメガロウイルスが一名唾液腺ウイルスと呼ばれるようにサル(Blackら, 1962)およびチンパンジー(Vogelら1955)においてもヒトや他の動物におけると同様、本ウイルスは唾液腺に強い親和性を持つようである。したがって今回の例においても原発巣は唾液腺にあり、それが何等かの誘因または刺激により全身化し、肺および肺門リンパ節に本症の病変を発現させたのではないかと考えられる。